

はがきは  
誰しもに開かれた  
表現手段ですね

作家  
堺屋 太一さん

1960年、通商産業省(現経済産業省)入省。在職中は日本万国博覧会を企画、開催し、沖縄海洋博や「サンシャイン計画」を推進。75年、「油断」で作家デビューし、79年退官。セビリア万国博覧会日本政府館、上海万国博覧会日本産業館を総合プロデュース。「環境の世代」の新聞を生んだ同名作をはじめ、「知徳革命」「平成三十年」「三人の二代目」など著書多数。

日本の大切な文化  
これからも  
受け継ぎたいです

株式会社エコリカ  
代表取締役社長

宗廣 宗三さん

1986年、コンピューター関連商社「株式会社エム・エス・シー」設立。2003年、環境保全と事業活動の両立を基本理念とした「株式会社エコリカ」設立。使用済みインクカートリッジの回収、リユース・リサイクル事業を日本で初めて手掛ける。この活動が評価され09年、第18回地球環境大賞部門賞、10年、第1回「エコマークアワード」において銀賞を受賞。照明の省エネにも注目し、09年からLED照明事業も展開。

郵便および通信に関する資料を展示・紹介する「郵政博物館(東京都墨田区)」で撮影

# 「はがき」の言葉は、どうしてあれだけ、 伝わるのだろうか——

はがきが公式に発行されはじめたのは、1873(明治6年)のこと。以来、思いの丈を込めた数多のはがきが人々の間を行き交ってきまし。それは場所と世代を超えて今も続く、古くて新しい通信手段です。はがき文化を未来に受け継ぐべく、「はがきの名文コンクール」を企画・実現した堺屋太一さんと、その趣旨に共鳴し協賛を始めた、インクカートリッジのリサイクルを手掛けるエコリカ社長・宗廣宗三さんが、はがきの魅力を大いに語り合います。

はがきが持つ「残る」「広がる」という魅力

堺屋 はがきの名文コンクールは、おかげさまで、今年で3回目となりました。宗廣さんの会社には、今年からご支援いただいています。3回までの受賞作を読まれて、どう感じていますか？



宗廣 聴ずかしいです、文字が読めなくなるくらい、泣いてしまいま

宗廣 私、はがきを家族で共有できるところも好きなんです。今、SNSが普及して、メールやメッセージアプリが日常的なコミュニケーション手段になりましたが、それらは基本的に「対」のやりとりです。対してはがきには、「対n(自然数)」といえる広がりがあります。例えば家のご主人宛に届いたはがきを、奥さんや子どもと一緒に楽しむことができ。会話のきっかけにもなります。書かれた情報のみならず、はがきというモノが「残る」という点も、SNSにはない魅力ですね。

宗廣 私は、はがきを家族で共有できるところも好きなんです。今、SNSが普及して、メールやメッセージアプリが日常的なコミュニケーション手段になりましたが、それらは基本的に「対」のやりとりです。対してはがきには、「対n(自然数)」といえる広がりがあります。例えば家のご主人宛に届いたはがきを、奥さんや子どもと一緒に楽しむことができ。会話のきっかけにもなります。書かれた情報のみならず、はがきというモノが「残る」という点も、SNSにはない魅力ですね。



宗廣 私、はがきを家族で共有できるところも好きなんです。今、SNSが普及して、メールやメッセージアプリが日常的なコミュニケーション手段になりましたが、それらは基本的に「対」のやりとりです。対してはがきには、「対n(自然数)」といえる広がりがあります。例えば家のご主人宛に届いたはがきを、奥さんや子どもと一緒に楽しむことができ。会話のきっかけにもなります。書かれた情報のみならず、はがきというモノが「残る」という点も、SNSにはない魅力ですね。

宗廣 2004年にエコリカを始めた時から、エコで高品質な商品をやってきました。エコとは、地球に対してエコロジーであると同時に、お客様にとっては高品質と、純正インクと同等あるいはそれ以上の品質を確保すること。また安全性にもこだわっています。エコリカは、誤って飲んでも体に影響のないインクを使っているんです。そうした取り組みが認められ、「エコマーク」の第1号認定を取得しました(再生インクカートリッジ部門)。